

第十三回 「歴史学者のお仕事」

岡部 芳彦

今回は久しぶりに僕のイギリスでの研究について書かせていただきます。いま僕が住むブリストルからロンドンまでは車で3時間かかります。ここのところ毎週水曜日は、僕が専門とする検認遺産目録（くわしくは第一回をご覧ください）の史料調査にロンドン近郊のイギリス国立公文書館に通っています。片道3時間のロングドライブなのでときどきサボりそうになりますが、検認遺産目録研究の第一人者で元ブリストル大学講師のジョン・ムーア先生も一緒なので毎週通っています。またガソリン代もかなりかさみますが、昨年一般社団法人信託協会の信託研究奨励金に選考していただいたおかげで、毎週史料調査に行くことができます。信託協会さまにはこの場を借りて御礼申し上げます。



イギリス国立公文書館
(The National Archives)

近年の歴史学者の仕事はだいぶ様変わりを見せています。国立公文書館の中では、デジタルカメラでの史料撮影が許されています。古文書でするので読みにくかったりするので、ひとまず撮影してパソコンなどを使ってズームを活用し解読します。なので年齢層に関係なく、ほうぼうでデジカメを使って史料を撮影しています。誤解を恐れずに言えば、現代の歴史学者の重要な仕事の一つは、デジカメでの史料の撮影だといっても過言ではないでしょう。



僕が調査している遺産目録は、時代によって書式が違い、18世紀の前半までは長い巻紙に書かれています。長年クルクルと巻かれていたので、重りをおいても元に戻ってしまい撮影には苦労します。それだけならいいのですが、中には6メートルを超えるものもあり、史料を見る用の一番長いテーブルでもはみ出してしまう。貴重な史料なので折るわけにもいかず、片手で史料を持ちつつ、プルプルと震えるもう一方の手でデジカメを構えて撮影します。一回ならいいのですが一日に何度も何度もあるので体力がいります。

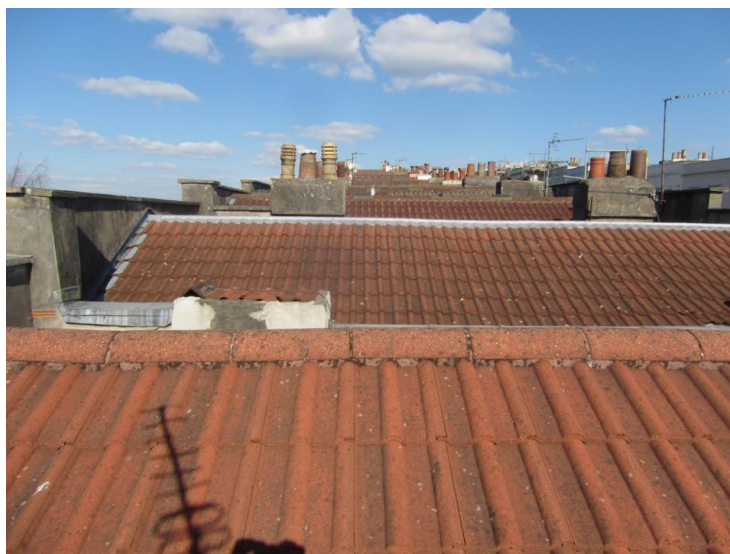
古文書の束。ここから、史料を探し出す
→デジカメで撮影する→解読する、と
いう作業が必要です。

歴史学者というと書物に埋もれていそうなイメージをお持ちの方も多いかもかもしれませんが、実はなかなか体をはった仕事です。今ブリストルの古地図と町を描いた銅版画を使って地理を説明する学術論文を書いています。18世紀の町の全景を描いた精密な図版がどれだけ正確か同じ位置から写真撮影しようと付近をくまなく歩いてみると、ここから描いたと思われる場所をピンポイントで見つけました。ただ、そこには家が立ち並ん



6メートルを超える史料。机をはみ出しても
まだ足りません。

でいて、見通しが悪く何も見えません。ただちょうど図版を描いた場所に立っている 3 階建ての家の屋根が工事中で、現場監督さんが「ハシゴで屋根に登って上から写真撮ればいい」と勧めてくれたのでそうさせていただいたのですが、そのハシゴが限りなく直立していて、また 3 階の屋根の上は超怖かったです。屋根の上で震えながら写真を撮っていると、大工さんがスタスタと隣まで来て、「歴史家の仕事って結構大変なんだね～アメイジング！」と言いながら不安定な足場の上で、陶器製のコップを持って紅茶を飲んでいました。その姿をみると、さすがイギリス人だなあと思いました。



3 階建ての屋根の上。19 世紀末の建物だそうで、煙突が残っています。